

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

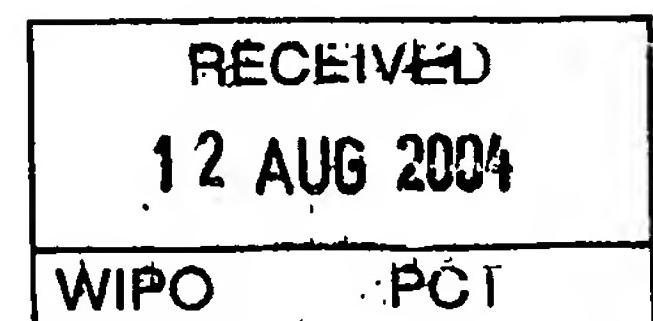
29.6.2004

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日
Date of Application: 2003年 7月 4日

出願番号
Application Number: 特願2003-191784
[ST. 10/C]: [JP2003-191784]



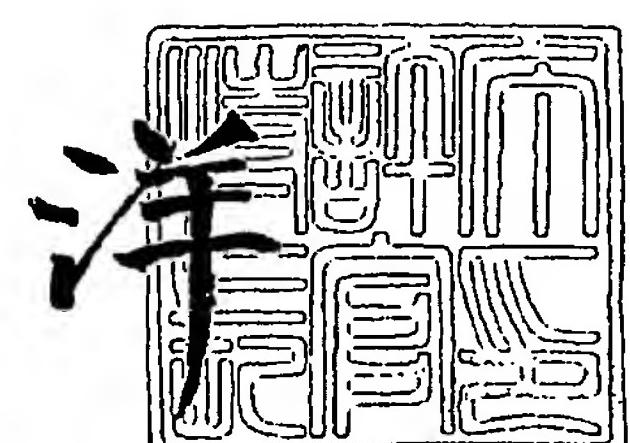
出願人
Applicant(s): 鹿島建設株式会社
日本メサライト工業株式会社

PRIORITY
DOCUMENT
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH RULE 17.1(a) OR (b)

2004年 7月30日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

小川



【書類名】 特許願
【整理番号】 K1000353
【特記事項】 特許法第30条第1項の規定の適用を受けようとする特許出願
【あて先】 特許庁長官殿
【国際特許分類】 C04B 14/16
【発明者】
【住所又は居所】 東京都港区元赤坂一丁目2番7号 鹿島建設株式会社内
【氏名】 高田 和法
【発明者】
【住所又は居所】 東京都港区元赤坂一丁目2番7号 鹿島建設株式会社内
【氏名】 柳井 修司
【発明者】
【住所又は居所】 東京都港区元赤坂一丁目2番7号 鹿島建設株式会社内
【氏名】 一宮 利通
【発明者】
【住所又は居所】 東京都港区元赤坂一丁目2番7号 鹿島建設株式会社内
【氏名】 渡部 貴裕
【発明者】
【住所又は居所】 東京都港区元赤坂一丁目2番7号 鹿島建設株式会社内
【氏名】 日紫喜 剛啓
【発明者】
【住所又は居所】 東京都港区元赤坂一丁目2番7号 鹿島建設株式会社内
【氏名】 盛田 行彦
【発明者】
【住所又は居所】 東京都港区元赤坂一丁目2番7号 鹿島建設株式会社内
【氏名】 平 陽兵

【発明者】

【住所又は居所】 東京都港区元赤坂一丁目2番7号 鹿島建設株式会社内

【氏名】 大野 俊夫

【発明者】

【住所又は居所】 東京都港区元赤坂一丁目2番7号 鹿島建設株式会社内

【氏名】 笠井 浩

【特許出願人】

【識別番号】 000001373

【氏名又は名称】 鹿島建設株式会社

【特許出願人】

【住所又は居所】 千葉県船橋市西浦3-9-2

【氏名又は名称】 日本メサライト工業株式会社

【代表者】 城倉 可勝

【代理人】

【識別番号】 100076130

【弁理士】

【氏名又は名称】 和田 憲治

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 004547

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【プルーフの要否】

要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 超高強度コンクリートの自己収縮低減法

【特許請求の範囲】

【請求項1】 圧縮強度が 100 N/mm^2 を超える超高強度コンクリートの配合において、粗骨材の30容積%以下を人工軽量骨材で置換し、コンクリート 1 m^3 当たり 30 Kg 以下の膨張材および／または単位結合材量に対し4重量%以下の収縮低減剤を配合して材齢91日での自己収縮量を $0\sim600\mu\text{m}/\text{m}$ にする超高強度コンクリートの自己収縮低減法。

【請求項2】 人工軽量骨材は、吸水率5%を超え～20%，圧壊荷重 $1000\sim2000\text{ N}$ 、絶乾密度 $1.4\sim2.0\text{ g/cm}^3$ のものである請求項1に記載の超高強度コンクリートの自己収縮低減法。

【請求項3】 超高強度コンクリートは、さらにJIS A 6204「コンクリート用化学混和剤」に準ずる減水剤、高性能減水剤、AE減水剤または高性能AE減水剤の少なくとも1種が配合されている請求項1または2に記載の超高強度コンクリートの自己収縮低減法。

【請求項4】 水とセメントを含む結合材との比（水結合材比）が $1.0\sim2.5$ %、粗骨材量が 400 L/m^3 以下である請求項1、2または3に記載の超高強度コンクリートの自己収縮低減法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、超高強度コンクリートの自己収縮低減法に関する。

【0002】

【従来の技術】

従来より、建築分野では、 $100\sim150\text{ N/mm}^2$ 級の超高強度コンクリートの適用実績がある（例えば非特許文献1）。土木分野ではほとんど実績がないと言ってもよいが、プレキャスト部材を使用した橋梁構造物で、圧縮強度 200 N/mm^2 を有する鋼纖維補強モルタル（ 2 mm 以下の粒子と金属纖維で構成された粗骨材を含まないモルタル）が最近実用化された（酒田みらい橋）。しかし

この特殊モルタルは強度は高いがコストも高い。前記の建築分野で実績のある圧縮強度 $100\sim150\text{N/mm}^2$ レベルのコンクリートは自己収縮が大きいので、そのままでは、一般に土木分野での大型のコンクリート構造物には不適である。

【0003】

【非特許文献1】建築技術2002.07. P184~188, P189~193

【0004】

【発明が解決しようとする課題】

超高強度コンクリートの自己収縮はひび割れ発生や、PC部材のせん断耐力の低下、PC部材とした時の有効プレストレスの低下を引き起こす原因となるので、構造物の設計・耐久性の両面からなるべく自己収縮を小さくすることが肝要であるが、補強繊維なしの圧縮強度 150N/mm^2 以上の超高強度コンクリートでは、材齢91日での自己収縮量が $400\mu\text{m/m}$ 以上、場合によっては $500\mu\text{m/m}$ 以上を示す。

【0005】

このため、目標とする強度および施工性を損なわずに且つ経済的に、超高強度コンクリートの自己収縮量を低減することが望まれている。本発明はこの要求を満たすことを課題とする。

【0006】

【課題を解決するための手段】

本発明によれば、圧縮強度 100N/mm^2 を超える超高強度コンクリートの配合において、粗骨材の30容積%以下を人工軽量骨材で置換し、コンクリート 1m^3 当たり 30Kg 以下の膨張材および/または単位結合材量に対し4重量%以下の収縮低減剤を配合して材齢91日での自己収縮量を $0\sim600\mu\text{m/m}$ にする超高強度コンクリートの自己収縮低減法を提供する。使用する人工軽量骨材は吸水率5%を超え~20%，圧壊荷重 $1000\sim2000\text{N}$ ，絶乾密度 $1.4\sim2.0\text{g/cm}^3$ のものであるのがよい。この超高強度コンクリートは、さらにJIS A 6204「コンクリート用化学混和剤」に従う減水剤、高性能減水剤、AE減水剤

または高性能AE減水剤の少なくとも1種を配合することができ、水とセメントを含む結合材との比（水結合材比）が10～25%，粗骨材量が0～400L/m³であるのがよい。セメントを含む結合材は、好ましくはセメントとシリカフュームからなる。

【0007】

【実施の形態】

本発明が対象とするのは、100N/mm²を超える圧縮強度（91日圧縮強度），さらには130N/mm²以上の圧縮強度（91日圧縮強度）を示す超高強度コンクリートである。このような超高強度コンクリートは、水，セメントを含む結合材，細骨材，最大寸法20mm以下の粗骨材，JIS A 6204「コンクリート用化学混和剤」に準ずる減水剤，高性能減水剤，AE減水剤または高性能AE減水剤の少なくとも1種を，水結合材比10～25%，粗骨材量400L/m³以下の配合基準で混練することによって製造することができる。セメントを含む結合材とは，ポルトランドセメント，ポゼラン系およびスラグ系混和材料を含む混合セメント，またはこれらにシリカフュームを混和したもの（シリカフュームセメントとも呼ばれる）を包含する。

【0008】

本発明は、このような超高強度コンクリートにおいて、前記の粗骨材の30容積%以下を人工軽量骨材で置換し，コンクリート1m³当り30Kg以下の膨張材および／または単位結合材量に対し4重量%以下の収縮低減剤を配合して材齢91日での自己収縮量を0～600μm/mに低減する。

【0009】

コンクリートの自己収縮は、コンクリート内部におけるセメントの水和反応の進行によって細孔空隙中の水が消費され，水面がより細孔径の小さな空隙に移動し，これによって水の表面張力に起因する毛細管張力が増大することによって起こる現象であると説明されている。いわゆる「自己乾燥」が原因である。水セメント比の小さな高強度コンクリートではとくにこれが顕著となり，シリカフューム等を用いて組織を緻密化するとさらに毛細管張力が大きくなり，収縮量も大きくなる。

【0010】

本発明に従って人工軽量骨材を適量配合すると、前記の自己乾燥を低減する作用を果たす。人工軽量骨材が保有する水分がコンクリート中の「貯水池」として機能し、水和反応によって消費される水分を補償し、細孔空隙中の乾燥を低減する「セルフキュアリング効果」を発揮し、これによって自己収縮や乾燥収縮の低減を図ることができる。

【0011】

本発明で使用する人工軽量骨材は、吸水率が5%を超える～20%，圧壊荷重が1000～2000N，絶乾密度が1.4～2.0g/cm³のものが好ましい。

【0012】

このような人工軽量骨材の代表的な製造例を挙げると、下記の化学成分をもつ火力発電所副生の石炭灰粗粉（a）と下記の化学成分をもつ頁岩の微粉末（b）とを（a）：（b）の重量比が4：6～6：4の割合で混合し、バインダーを加えて造粒したあと、これをロータリーキルンで約1100～1200℃で焼成し、その冷却過程においてほぼ100～200℃から水中に急冷する。得られた焼成品は粗碎し分級して5mm以下の細骨材分と5～15mmの粗骨材分とに分別することができる。

(a) 石炭灰の化学成分値（質量%）=SiO₂：約54%，Al₂O₃：約29%，Fe₂O₃+FeO：約4.5%，CaO：約3.5%，MgO：約1.0%，強熱減量：約4.7%

(b) 頁岩の化学成分値（質量%）=SiO₂：約70%，Al₂O₃：約13%，Fe₂O₃+FeO：約4.2%，CaO：約1.6%，MgO：約1.6%，強熱減量：約5.6%

【0013】

このようにして得られた5～15mmの粗骨材分は、例えば絶乾密度=1.52g/cm³，熱間吸水率=15%，JIS Z 8841に従う圧壊荷重=1130Nを示す。ここで、熱間吸水率とは、この人工軽量骨材の焼成過程において100～200℃から水冷した後、常温状態にて、これを表乾状態で吸水率を測定した値を言う。このものは、細孔半径50～6000nmにおいて細孔量がほぼ均等に分布

しており、累積細孔量（総細孔量）は約 $110\text{ m}^3/\text{g}$ に達する。このことが、低比重でありながら高強度化に寄与し且つ保水性能を高めるのに有効に作用する。同様の原理に従い、原材料の選定と焼成条件の適正な制御を行うことによって、JIS Z 8841に従う圧壊荷重が $1000\sim2000\text{ N}$ の範囲、絶乾密度が $1.4\sim2.0\text{ g/cm}^3$ の範囲、吸水率が 5% を超える~ 20% の範囲にある人工軽量骨材を製造することができ、この人工軽量骨材を用いることによって、自己収縮量が少ない超高強度コンクリートを製造することができる。

【0014】

人工軽量骨材の圧壊荷重が 1000 N 未満では 100 N/mm^2 以上のコンクリート強度を得ることができず、逆に 2000 N を超えるものでは十分な細孔量を確保できなくなり、このために吸水率が低下するので自己収縮量の低減に寄与することができない。したがって、本発明で用いる人工軽量骨材の圧壊荷重は $1000\sim2000\text{ N}$ 、好ましくは $1100\sim2000\text{ N}$ 、さらに好ましくは $1200\sim1800\text{ N}$ である。また、該人工軽量骨材の絶乾密度が 1.4 g/cm^3 未満では圧壊荷重 1000 N 以上を確保するのが困難となり、該密度が 2.0 g/cm^3 を超えると十分な吸水率を確保するのが困難となるので、本発明で用いる人工軽量骨材の絶乾密度は $1.4\sim2.0\text{ g/cm}^3$ 好ましくは $1.40\sim1.70\text{ g/cm}^3$ であるのがよい。吸水率については 5% 以下ではコンクリートの自己収縮や乾燥収縮に対する改善効果が十分に現れず、 20% を超えると密度 2.0 g/cm^3 以下で圧壊強度 1000 N 以上を確保するのが困難となるので、本発明で用いる人工軽量骨材の吸水率は 5% を超える~ 20% 、好ましくは $7\sim20\%$ 、さらに好ましくは $10\sim18\%$ であるのが望ましい。

【0015】

超高強度コンクリートへの人工軽量骨材の配合に際しては、粗骨材の配合量の 30 容積\% 以下をこの人工軽量骨材で置換するという処法でよい。粗骨材の 30 容積\% より多くを人工軽量骨材で置換すると超高強度コンクリートが本来有すべき性質を損なうおそれがでてくるからである。

【0016】

本発明においては、このように粗骨材の一部を人工軽量骨材で置換したうえ、

さらに自己収縮量を確実かつ精密にコントロールするために、膨張材および／または収縮低減剤を所定量配合する。すなわち、人工軽量骨材を適量配合したうえで、膨張材または収縮低減剤をそれぞれ単独で配合するか、または膨張材と収縮低減剤を併用して配合する。

【0017】

使用する膨張材としては、水と反応してエトリンガイトと呼ばれる針状結晶を生成し、これが通常のセメント反応生成物よりも粗な組織を形成し、これによる見かけの体積が大きくなることを利用してコンクリートを膨張させるものが好ましい。このような市販の膨張材としては、例えば電気化学工業株式会社製の商品名パワーCSA、パワーCSA type R等が挙げられる。膨張剤の配合量としては、超高強度コンクリート1m³当たり30Kg以下とすればよい。

【0018】

収縮低減剤については、コンクリートの収縮の原因となる毛細管張力を低減させる作用をもつもの、すなわち細孔中の水の表面張力を低減する効果をもち、ことによって、自己収縮や乾燥収縮を低減する効果を発揮するものが好ましい。このような市販の収縮低減剤としては、低級アルコール付加物のもの、例えば太平洋マテリアル株式会社製の商品名テトラガードAS21等が使用できる。収縮低減剤の配合量としては、超高強度コンクリートの単位結合材量に対し4重量%以下とすればよい。

【0019】

本発明の超高強度コンクリートに用いる結合材としては、ポルトランドセメントのほか、次のような結合材例えば、シリカフューム、フライアッシュ、石炭ガス化フライアッシュ、高炉スラグ微粉末などを使用することができる。

【0020】

本発明の超高強度コンクリートに用いる化学混和剤（JIS A 6204に準ずる減水剤、高性能減水剤、AE減水剤または高性能AE減水剤の少なくとも1種）としては、ポリカルボン酸系、ポリエーテル系、ナフタレン系、メラミンスルホン酸系、アミノスルホン酸系等のものが使用できるが、とくにポリカルボン酸系もしくはポリエーテル系のものが好ましい。また、その助剤として消泡剤を使用する

ことができる。

【0021】

以下に、本発明の超高強度コンクリートの自己収縮低減法を本発明者らが行った代表的な試験例によって具体的に説明する。

【0022】

試験例1

〔使用材料〕

セメント：シリカフュームセメント（密度 3.08 g/cm^3 ，比表面積 $4050 \text{ cm}^2/\text{g}$ ）

細骨材：段戸産石英片岩碎砂（表乾密度 2.62 g/cm^3 ，吸水率0.72%，粗粒率3.10）

粗骨材：段戸産石英片岩碎石（最大寸法20mm，表乾密度 2.62 g/cm^3 ，吸水率0.57%，実績率63.1%）

混和剤：ポリカルボン酸エーテル系高性能減水剤（花王株式会社製の商品名マイティ3000TH2）

人工軽量骨材：石炭灰系の人工軽量骨材（日本メサライト工業株式会社の商品名Jライト，粒径5～10mm，絶乾密度 $1.40\sim1.60 \text{ g/cm}^3$ ，吸水率12.2%，圧壊荷重 $1100\sim1300 \text{ N}$ ）

膨張材：石灰-エトリンガイト系膨張材（密度 3.02 g/cm^3 ，比表面積 $3500 \text{ cm}^2/\text{g}$ ，電気化学工業株式会社製の商品名パワーCSA type R）

収縮低減剤：低級アルコール付加物（太平洋マテリアル株式会社製の商品名テトラガードAS21）

【0023】

表1に試験の水準とコンクリートの配合条件を示した。表1中の記号は次のとおりである。W=水，C=シリカフュームセメント，G=粗骨材，SP=高性能減水剤，JL=人工軽量骨材，EX=膨張材，RA=収縮低減剤。表1のとおりの12の配合ケースについて、以下の試験を行った。表2にその基本配合を示した。

【0024】

【表1】

配合名	空気量 (%)	W/(C+ EX) (%)	W (kg/m ³)	G+JL 容積 (l/m ³)	SP/(C+ EX) (%)	EX (kg/m ³)	RA/ (C+EX) (%)	JL/(G+JL) 容積率 (%)
基本配合						-	-	-
E20						20	-	-
E25						25	-	-
E30						30	-	-
R2						-	2.0	-
E25R2	1.5	17	155	300	1.5	25	2.0	-
JL10						-	-	10
JL20						-	-	20
JL30						-	-	30
JL20E10						10	-	20
JL20R1						-	1.0	20
JL20E10R05						10	0.5	20

【0025】

【表2】

W/C (%)	空気量 (%)	粗骨材容積 (l/m ³)	SP/C (%)	単位量(kg/m ³)				
				水 W	セメント C	細骨材 S	粗骨材 G	混和剤 SP
17	1.5	300	1.5	155	912	613	798	13.7

【0026】

〔試験方法〕

コンクリートは強制二軸式ミキサ（容量100リットル、回転数60rpm）を用いて練り混ぜた。粗骨材（人工軽量骨材含む）以外の材料をミキサに投入後120秒練り混ぜ、一旦ミキサを停止して内壁や羽に付着したセメントを搔き落とした後に再びミキサを作動して180秒練り混ぜた。さらに粗骨材（人工軽量骨材含む）投入後180秒練り混ぜ、ミキサから排出した。コンクリート練上がり後は直ちにスランプフローと空気量、コンクリート温度を測定し、圧縮強度、凝結時間および自己収縮を測定するための供試体を作製した。圧縮強度はJIS A1108-1999に準じ、材齢7, 28, 56, 91日の4材齢で測定した。凝結時間はJIS A1147-2001に準じて測定したが、自己収縮の測定開始時間を知るために始発時間までの計測とした。自己収縮はJCIA自己収縮委員会-1996の方法に準拠したが、ひずみの測定は低剛性タイプの埋込みひずみ計測器を使用した。

み計によって行った。

【0027】

〔スランプフローおよび凝結時間〕

図1に各配合のスランプフローを示した。図1の結果から、膨張材の添加によってスランプフローは低下し、施工性を損なう傾向があることがわかる。逆に収縮低減剤はスランプフローを増大させる効果が見られた。また、人工軽量骨材の置換率が高いほどスランプフローは増大傾向を示し、施工性が向上することがわかる。スランプフロー550mm以上の配合については、良好な自己充てん性を有しているものと判断された。なお、空気量はすべてのケースにおいて1.3～2.5%の範囲に調整されたものである。

【0028】

図2に各配合の凝結始発時間の結果を示した。膨張材および人工軽量骨材を単独で使用した場合には、基本配合と比較して凝結始発時間に大きな差は見られない。しかし、これらを併用したケース（JL20E10）では凝結始発時間は早くなる結果が得られた。また、収縮低減剤は明らかに凝結を遅延させる影響のあることが確認された。

【0029】

〔圧縮強度〕

図3～5に圧縮強度の試験結果を示した。基本配合のものは、材齢28日で164N/mm²、91日で190N/mm²の高い圧縮強度を示した。図3～5の全体から言えることは、自己収縮を意図したいずれのケースにおいても、基本配合の圧縮強度を下回る結果となっているが、材齢56日では全ての配合で目標とする150N/mm²以上の圧縮強度が得られている。

【0030】

より具体的には、図3は膨張材および収縮低減剤を単独使用もしくは併用した場合における強度発現履歴を比較したものである。膨張材のみを使用した場合（E20, E25, E30）は、材齢7日では添加量が多いほど低い強度を示しているが、28日以降はほぼ同じ強度となり、91日では170N/mm²程度に達した。収縮低減剤を添加率2%で使用した場合（R2）は、長期強度が膨張材

を使用した場合よりもやや大きくなり、材齢91日で 176 N/mm^2 である。膨張材と収縮低減剤を併用したE25R2では、材齢56日の試験結果がやや小さいものの、それ以外の材齢ではほぼE30と同様の強度履歴となっている。

【0031】

図4は人工軽量骨材の置換率別に圧縮強度の発現履歴を示している。全ての材齢において置換率が大きいほど圧縮強度は小さくなり、特に置換率30%（JL30）では材齢28日以降ほぼ頭打ちの状況が見られ、 150 N/mm^2 前後で横ばいとなった。しかし、置換率20%までは材齢91日に至るまで圧縮強度の増進が認められ、置換率20%（JL20）で 170 N/mm^2 に達した。

【0032】

図5は人工軽量骨材の置換率を20%で一定とし、さらに膨張材および／または収縮低減剤を併用した場合の圧縮強度の発現履歴を示したものである。いずれの配合においても、JL20よりも圧縮強度が低減する結果となったが、JL20E10, JL20R1, JL20E10R05間の差異は小さく、3ケースとも材齢56日以降ほぼ頭打ちの状況となった。これらでは材齢91日で $149\sim155\text{ N/mm}^2$ 程度の圧縮強度が得られた。

【0033】

〔自己収縮〕

図6～8に自己収縮の測定結果を示した。各配合ケースとも、凝結始発時のひずみを0とし、それ以降の20℃非乾燥状態における自由収縮（膨張）ひずみを計測したものである。基本配合（■印）のものでは、材齢91日で $650\mu\text{m}/\text{m}$ という大きな自己収縮が計測された。

【0034】

図6は、膨張材および／または収縮低減剤を使用した場合における自己収縮の経時変化を示しているが、膨張材を 20 Kg/m^3 使用すると材齢91日で $370\mu\text{m}/\text{m}$ （E20）となり、基本配合よりも40%以上自己収縮を低減することができる。さらに添加量を増すごとに低減効果は大きくなり、 30 Kg/m^3 （E30）で $180\mu\text{m}/\text{m}$ （材齢91日）となり、70%以上の低減効果を示す。収縮低減剤は添加率2%（R2）で膨張材 20 Kg/m^3 のケース（E20

) とほぼ同じ程度の収縮低減効果 (40%) を示す。膨張材 25 Kg/m^3 と収縮低減剤 2% を併用したケース (E25R2) では、両者単独使用の場合の効果を足し合わせた以上の効果が現れ、材齢初期に $110\mu\text{m}/\text{m}$ の膨張が確認された後、材齢 91 日に至るまでその膨張量は漸減する。

【0035】

図7は人工軽量骨材の置換率別に自己収縮の経時変化を示したものであるが、材齢 91 日での低減率は、それぞれ 24% (JL10), 34% (JL20), 57% (JL30) となり、置換率が高いほど自己収縮の低減効果は大きいことがわかる。

【0036】

以上の試験例1の結果から、次のことが要約される。

- (1) 基本配合では、材齢 91 日で 190 N/mm^2 の高い圧縮強度を示すが $650\mu\text{m}/\text{m}$ の自己収縮が起きる。
- (2) 膨張材 $20 \sim 30\text{ Kg/m}^3$ では、収縮低減効率は大きいが、施工性が低下する。
- (3) 収縮低減剤 2% では、収縮低減効率が大きく、施工性も低下しない。
- (4) 膨張材 25 Kg/m^3 と収縮低減剤 2% を併用すると、自己収縮をゼロにすることができる。
- (5) 人工軽量骨材は粗骨材に対する置換率に応じて自己収縮を低減することができるが、強度低下も置換率に応じて大きくなる。
- (6) 人工軽量骨材の置換率を最大 20 容積% とし、少量の膨張材・収縮低減剤を併用すると、比較的低コストで高い収縮低減効率が実現できる。

【0037】

試験例2

本試験は、人工軽量骨材の吸水率がコンクリートの自己収縮率に及ぼす影響を見たものである。

〔使用材料〕

- ・セメント：低熱ポルトランドセメント（記号 L）（住友大阪セメント株式会社製、密度 3.22 g/cm^3 ）

- ・細骨材：陸砂（静岡産：表乾密度 2.62 g/cm^3 , 吸水率1.38%）
- ・粗骨材：

 - (1) 天然骨材（記号N）：（奥多摩産碎石：表乾密度 2.65 g/cm^3 , 吸水率0.50%）
 - (2) 人工軽量骨材（記号J）：（日本メサライト工業株式会社製の商品名Jライト, 絶乾密度 1.41 g/cm^3 , 吸水率を5%, 10%または12.5%に調整したもの）
 - (3) 人工軽量骨材（記号M）：（日本メサライト工業株式会社製の商品名メサライト, 絶乾密度 1.29 g/cm^3 , 吸水率28%）

- ・混和剤：高性能AE減水剤（ポゾリス株式会社製の商品名SP8SBs）
- ・水：調布市の上水道水

【0038】

表3にコンクリートの調合（実験No. 1～5）を示した。各実験における記号は前記の材料を表記しており、例えばLJ-5%は、低熱ポルトランドセメントを使用し、粗骨材としてJライトの吸水率5%のものを使用したことを示す。

【0039】

【表3】

コンクリートの配合

実験 No.	記号	W/C (%)	S/A (%)	空気量 (%)	W (kg/m ³)	C (kg/m ³)	S (kg/m ³)	G (kg/m ³)	高性能AE 減水剤(Cx%)
1	LJ-5%	30	45	3	170	567	736	484	C×10
2	LJ-10%							484	C×10
3	LJ-12.5%							484	C×09
4	LM-28%							442	C×09
5	LN-0.5%							909	C×11

【0040】

各調合のコンクリートを練り混ぜ、試験例1と同様にして自己収縮を測定するための供試体を作製し、試験例1と同様にして自己収縮を測定した。その結果を図9に示した。

【0041】

図9に見られるように、吸水率0.5%の天然粗骨材では自己収縮を示す。吸水率5%のJライトを用いた場合には自己長さ変化はマイナス方向となり、自己収縮の低減効果は見られない。これに対して、吸水率10%，12.5%のJライトを用いた場合には、自己長さ変化はプラス方向となり、自己収縮の低減効果を示す。吸水率28%のメサライトを用いた場合には、吸水率10%のJライトと同様に自己長さ変化は+200μm程度で頭打ちにある。

【0042】**【発明の効果】**

以上説明したように、本発明によると、目標とする強度および施工性を損なわずに且つ経済的に超高強度コンクリートの自己収縮量を低減することができる。このため、建築分野のみならず、土木分野において超高強度コンクリートの適用が可能となり、PC部材とした時にも自己収縮に基づく有効プレストレス低下の問題も解消される。

【図面の簡単な説明】**【図1】**

超高強度コンクリートの配合例とスランプフローとの関係を示す図である。

【図2】

超高強度コンクリートの配合例と凝結始発時間との関係を示す図である。

【図3】

超高強度コンクリートに膨張材および／または収縮低減剤を配合した場合の圧縮強度の経時変化を示す図である。

【図4】

超高強度コンクリートに人工軽量骨材を配合した場合の圧縮強度の経時変化を示す図である。

【図5】

超高強度コンクリートに人工軽量骨材と膨張材および／または収縮低減剤を配合した場合の圧縮強度の経時変化を示す図である。

【図6】

超高強度コンクリートに膨張材および／または収縮低減剤を配合した場合の自己収縮ひずみの挙動を示す図である。

【図7】

超高強度コンクリートに人工軽量骨材を配合した場合の自己収縮ひずみの挙動を示す図である。

【図8】

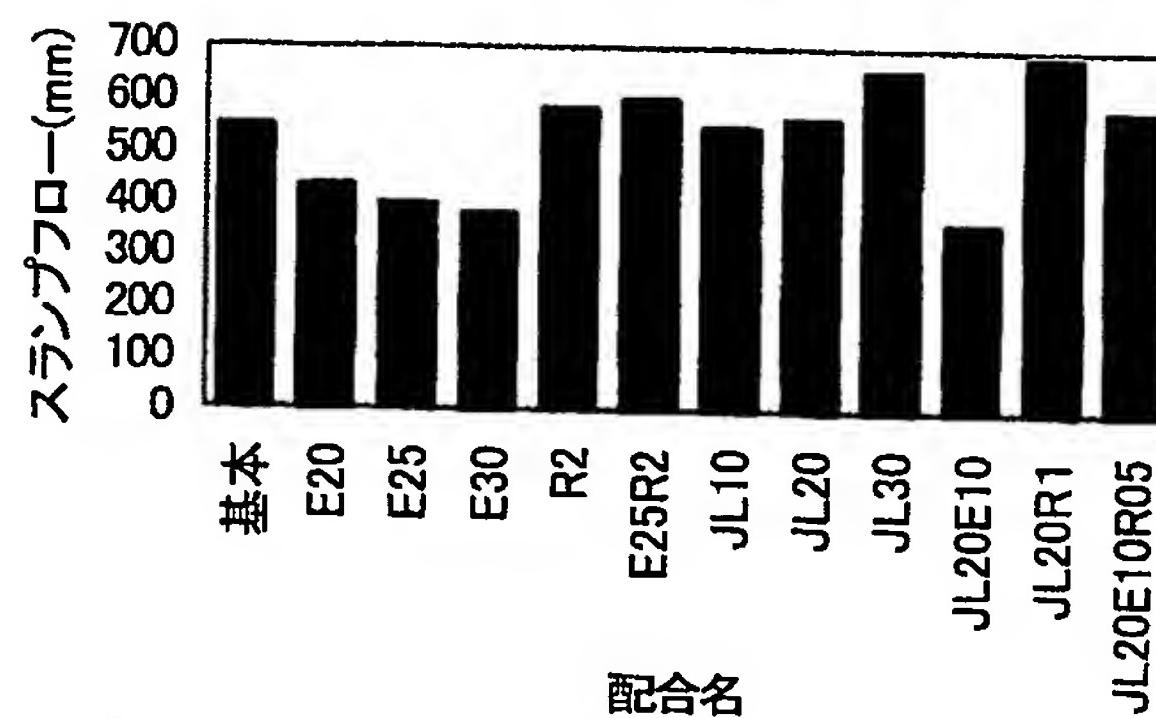
超高強度コンクリートに人工軽量骨材と膨張材および／または収縮低減剤を配合した場合の自己収縮ひずみの挙動を示す図である。

【図9】

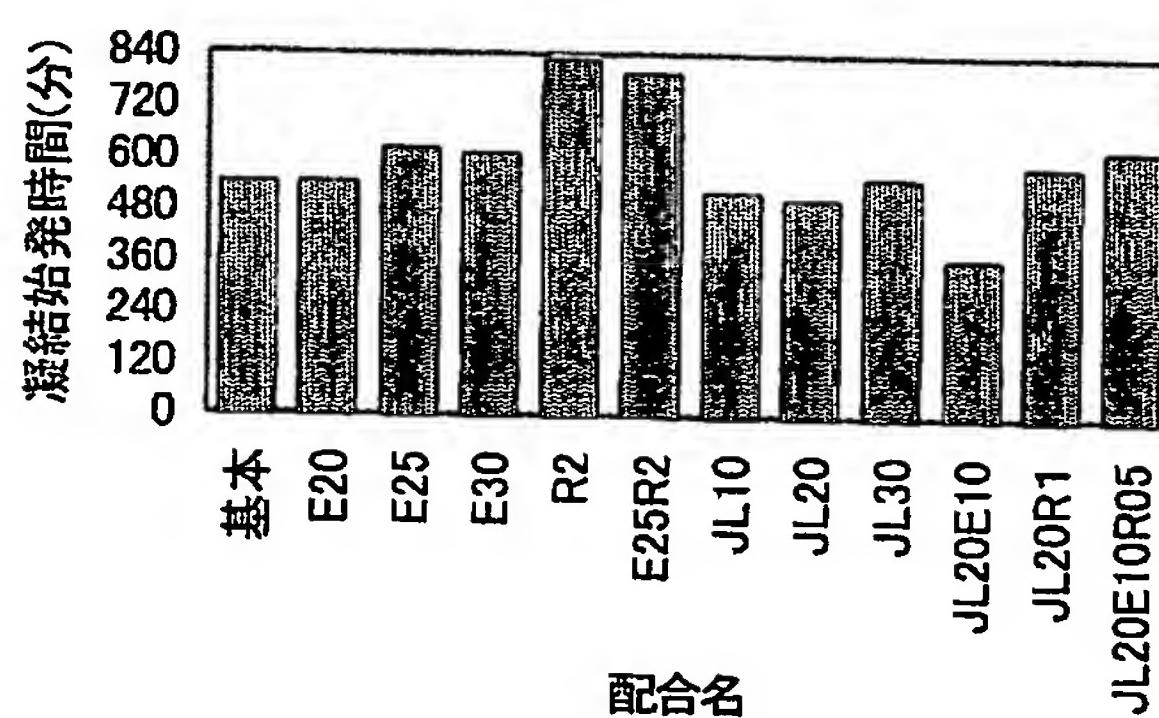
粗骨材の吸水率と自己収縮ひずみ（自己長さ変化）との関係を示す図である。

【書類名】 図面

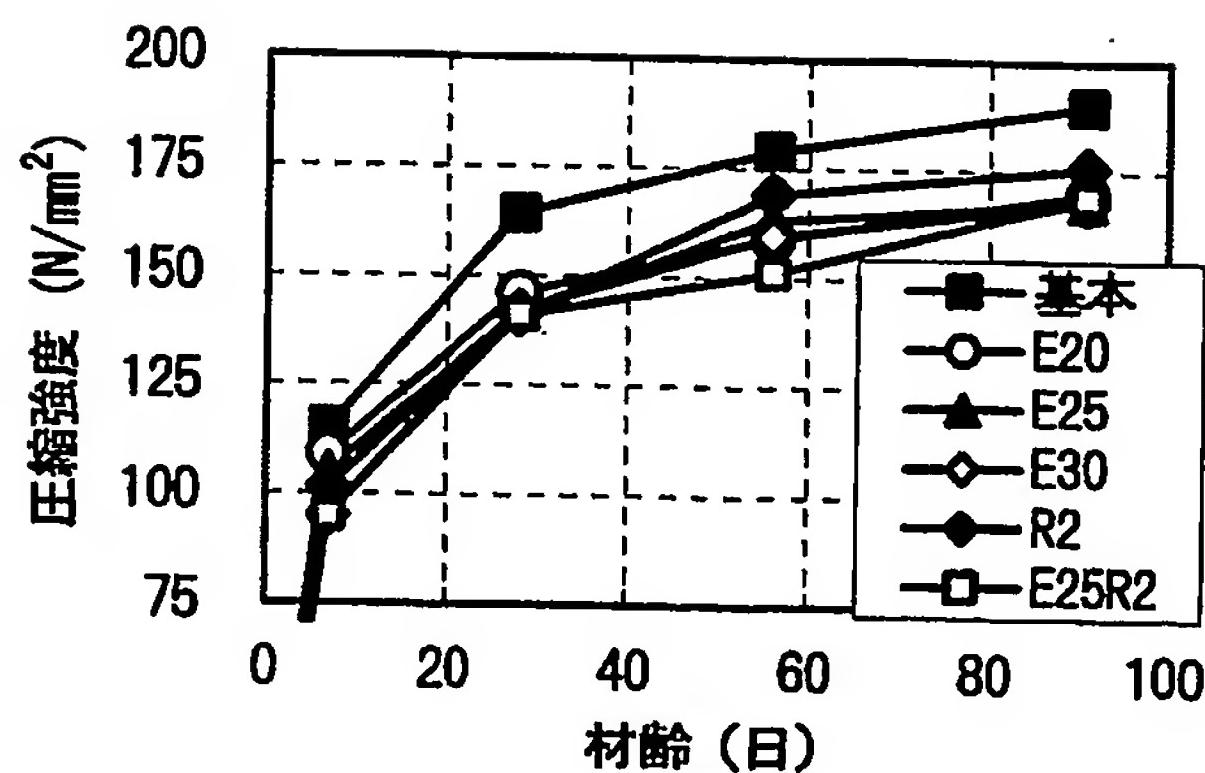
【図1】



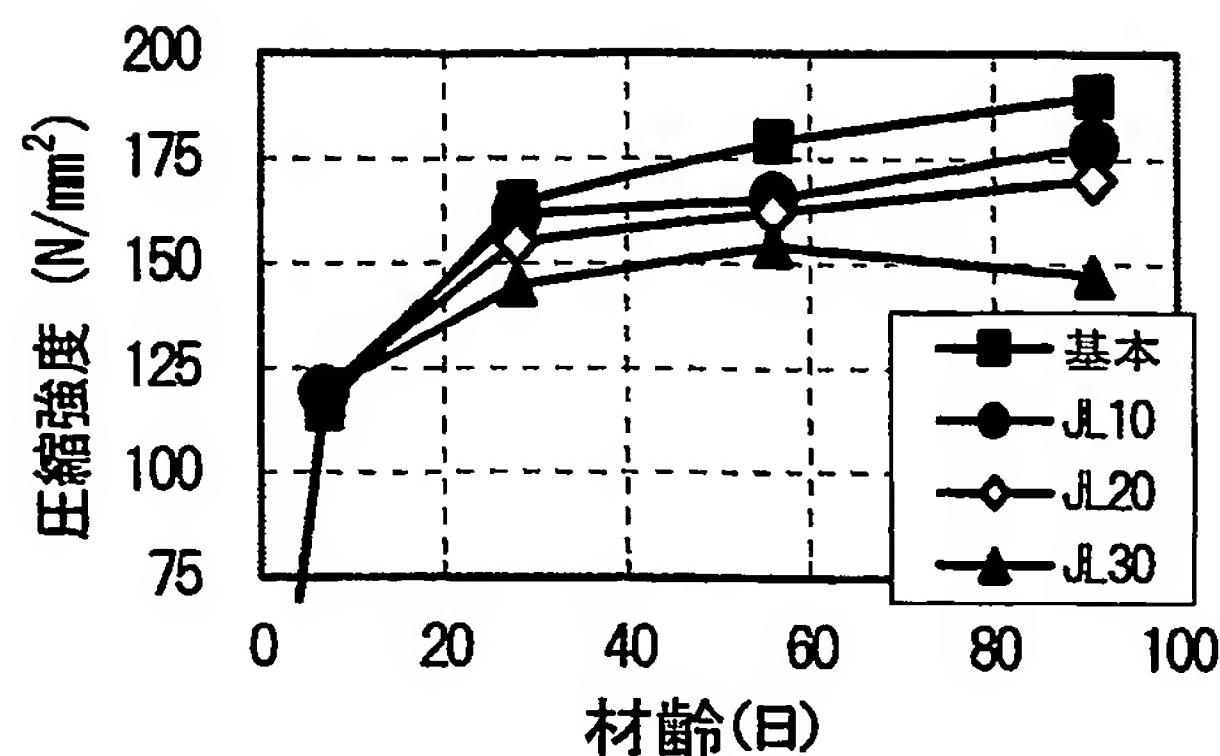
【図2】



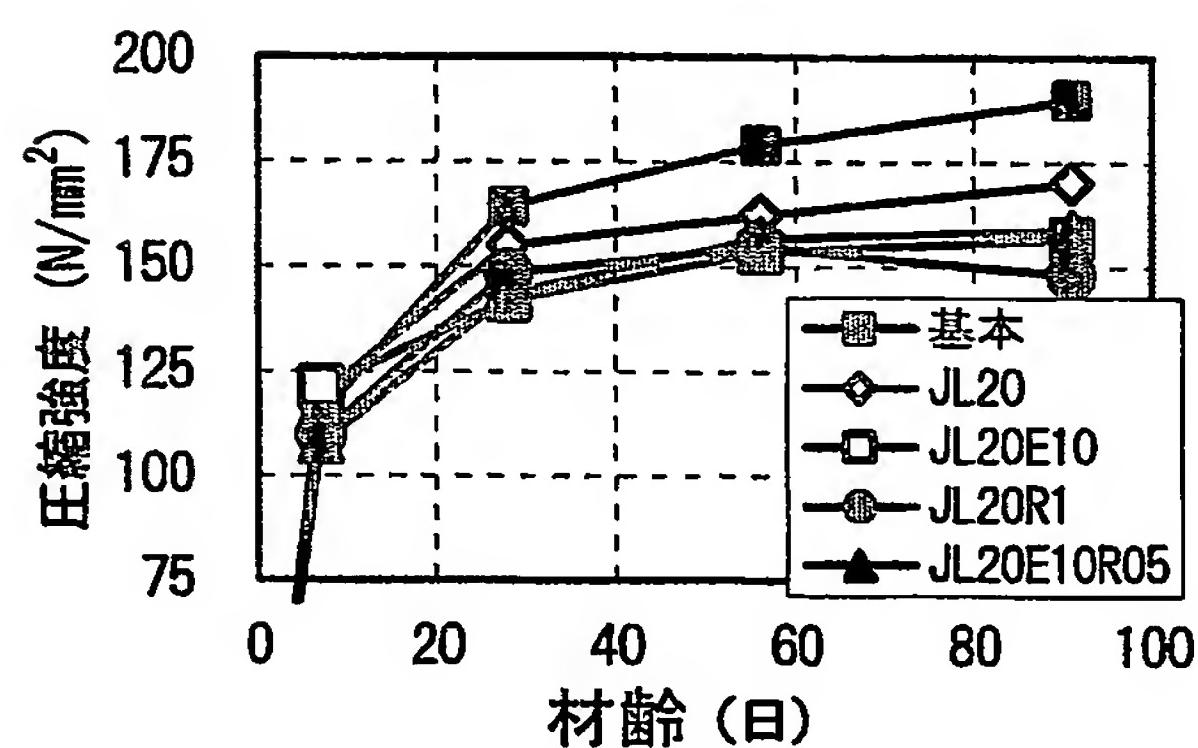
【図3】



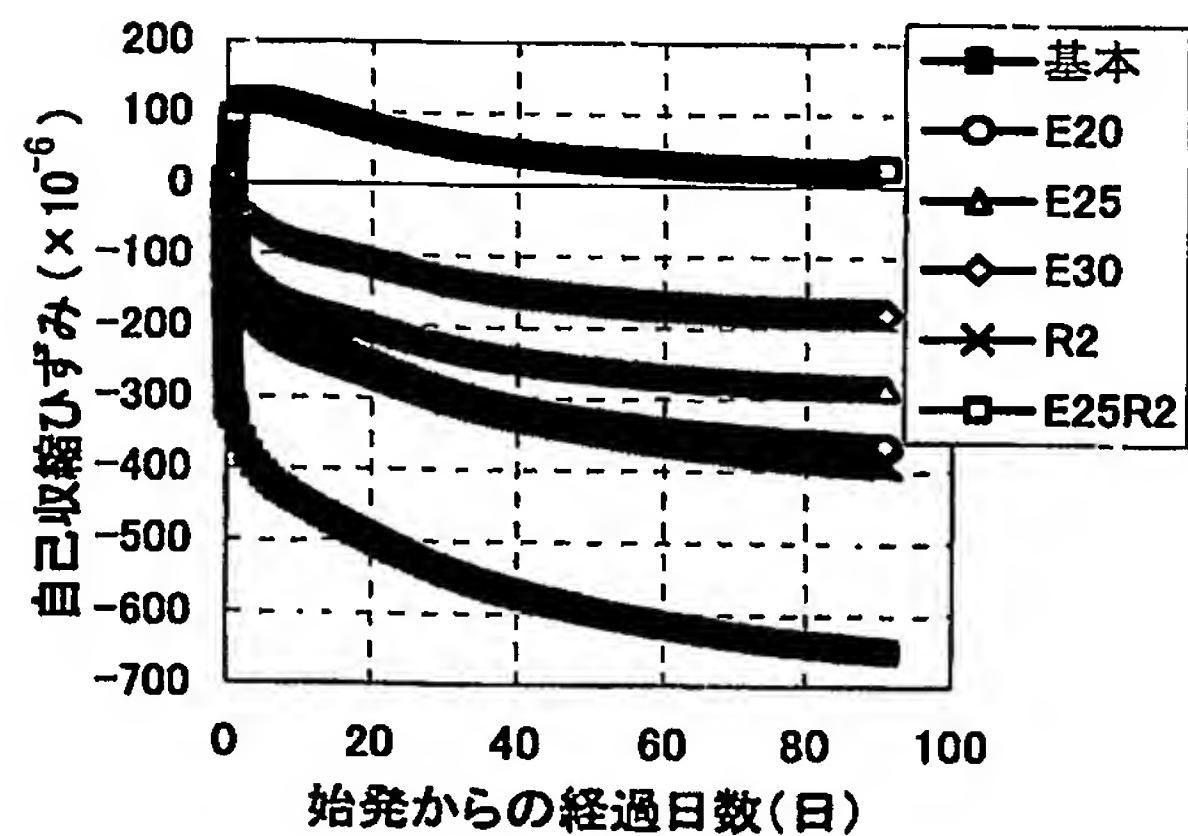
【図 4】



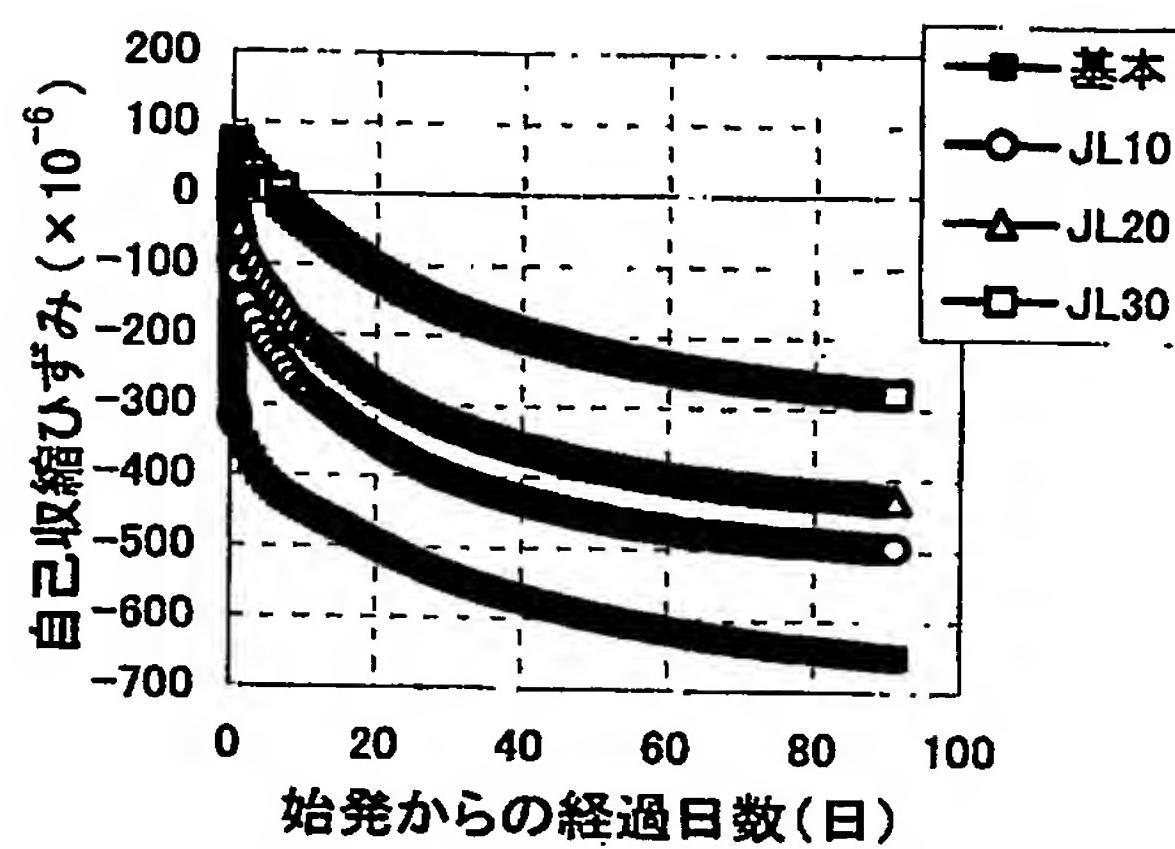
【図 5】



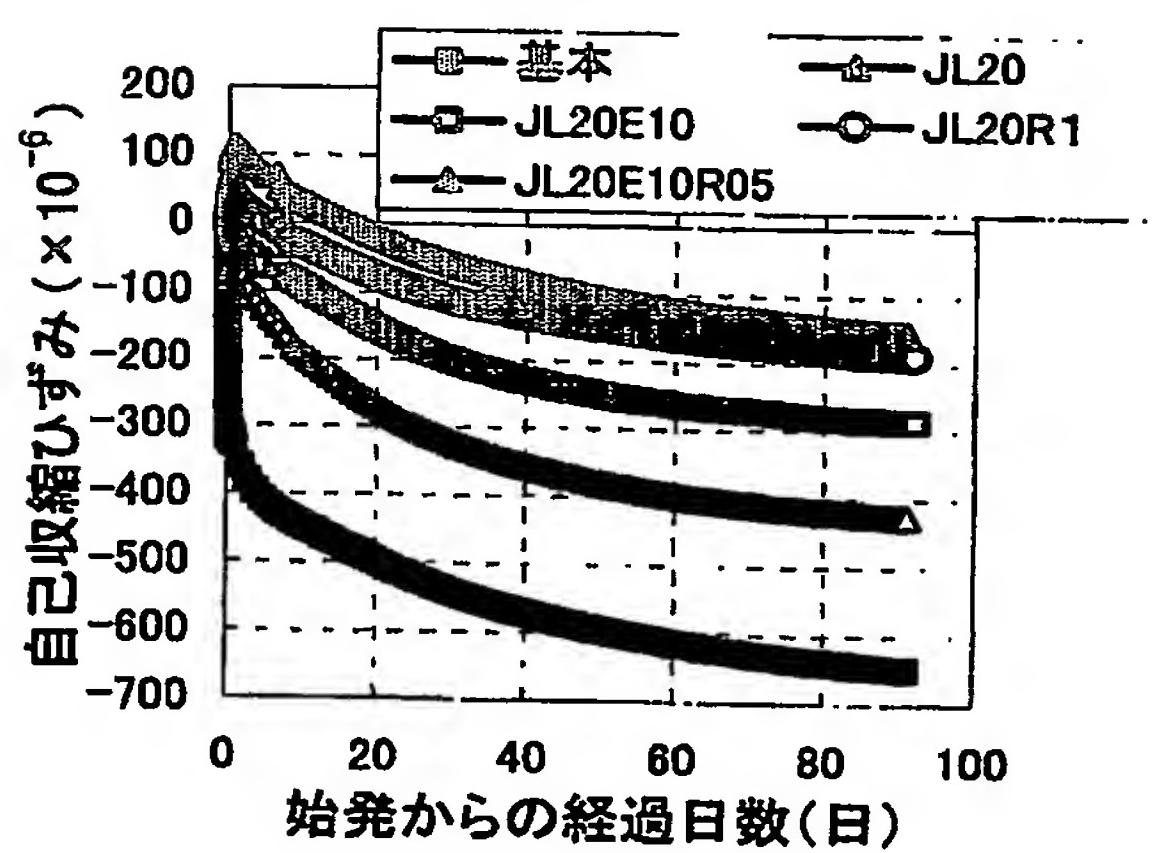
【図 6】



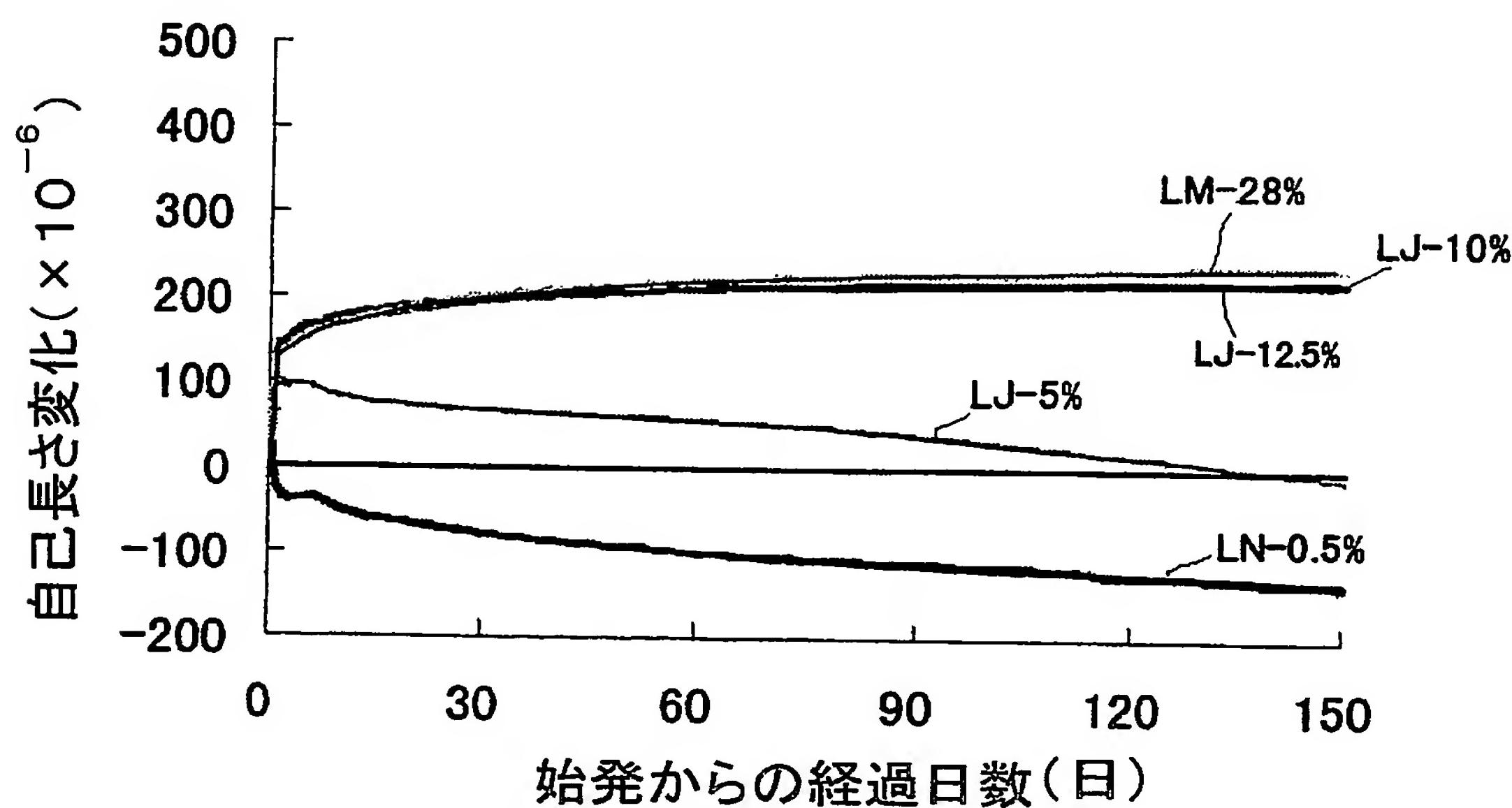
【図7】



【図8】



【図9】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 超高強度コンクリートに起きた自己収縮を低成本で低減する。

【解決手段】 圧縮強度 100 N/mm^2 を超える超高強度コンクリートの配合において、粗骨材の30容積%以下を人工軽量骨材で置換し、コンクリート 1 m^3 当たり 30 kg 以下の膨張材および／または単位結合材量に対し4重量%以下の収縮低減剤を配合して材齢91日での自己収縮量を $0 \sim 600\text{ }\mu\text{m/m}$ 以下にする超高強度コンクリートの自己収縮低減法である。人工軽量骨材は、吸水率5%を超え～20%，圧壊荷重 $1000 \sim 2000\text{ N}$ 、絶乾密度 $1.4 \sim 2.0\text{ g/cm}^3$ のものを使用する。

【選択図】 なし

認定・付加情報

特許出願の番号	特願2003-191784
受付番号	50301116163
書類名	特許願
担当官	第五担当上席 0094
作成日	平成15年 9月 4日

<認定情報・付加情報>

【提出日】	平成15年 7月 4日
-------	-------------

特願 2003-191784

出願人履歴情報

識別番号 [000001373]

1. 変更年月日 2001年10月26日

[変更理由] 住所変更

住 所 東京都港区元赤坂一丁目2番7号
氏 名 鹿島建設株式会社

特願 2003-191784

出願人履歴情報

識別番号 [391017159]

1. 変更年月日 1991年 2月 1日

[変更理由] 新規登録

住 所 千葉県船橋市西浦3丁目9番2号

氏 名 日本メサライト工業株式会社